

# Kaori Nakano

中野香織  
ファッション歳時記  
99

## キャビアと ツイード

は、スコットランドならではの織物だと思い込んでいました。

これを日本で生産することに挑戦したのが、尾張一宮で毛織物を生産する老舗、中外国島株式会社です。社長の伊藤核太郎さんが、北海道の羊の毛が刈り取られた後すべて廃棄されているのを見て、なんとか活かせないかと思ひ、「北海道ツイード」の生産に挑戦しました。

試作品にふれてみると、スコットランド産の粗剛なツイードに比べると手ざわりが柔らかく、色合いにもどこか優しい「日本らしさ」が漂う生地です。今後、地域の雇用を確保し、乳業や牧羊業、畜産業も巻き込んだ循環型社会を作りながら生産を軌道に乗せたいと伊藤社長は語ります。

瀬戸内キャビアと北海道ツイード、どちらにおいても、壊される建物や捨てられるものを「なんとか活かせないか」と考え、工夫したことから新しい産業の萌芽が生まれていることに注目したい。持続型社会の実現という壮大な話に聞こえますが、壊す前に、捨てる前に、「一歩立ち止まって別の活かし方を考える」ということが第一歩になると教えられます。

キャビアといえば、旧ソ連（ロシア）のエアロフロートで出された大量の塩辛いキャビアと黒パンの朝食を思い出してしまのですが。なんと最近では日本でもキャビアが生産されているのです。

何社かが生産しているようですが、私が取材する機会に恵まれたのは、香川県に本社をおく株式会社CAVICのCEO、板坂直樹さんです。香川の母校の中学校が廃校になると聞き、なんとか施設を活かせないかと考え、体育館に水槽を置き、そこでチョウザメを飼育してキャビアを生産することにしたそうです。

中学校の体育館に長寿を誇るチョウザメの大群が回遊している図を想像すると思わず笑顔になります。故郷の建物を保存し、雇用を生み出している

という点でも、いま視野に入れるべきSDGs（持続可能な開発目標）に合致する事業ですね。肝心のキャビアはといえば、従来のイメージを覆す、新鮮でふくらとした味わいで、クセもなく美味しいのです。長期保存用に塩や添加物を大量に加える必要がないので、魚卵本来の新鮮なねつとり感が保たれています。

輸入品しかありえないと思ひ込んでいたのに、国内でも生産できると知った感動。出会うときには続けて出会うもので、北海道でツイードが生産されていることも知りました。ツイードとは、もともと、スコットランドのボーダー地方を流れるツイード川流域で作られた粗く厚い織物です。土地の植物の色彩もちらちらと入れ、生地に複雑な深みを出すこともあるツイード

### なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。最新刊「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)、共著「フォーマルウェアの教科書(洋装・和装)」(日本フォーマルウェア文化普及協会)好評発売中。

